

会報

No. 82

平成22(2010)年8月15日

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町9
京都府立図書館内
TEL (075) 762-4655

二期目の会長就任によせて

府内どこでも住民が

「図書館の生活支援機能」を享受できるように

京都府図書館等連絡協議会会長
八幡市立八幡市民図書館館長

仁科晴夫

ACジャパン（旧公共広告機構）のTVコマercialで、国境なき医師団が支援キャンペーンをおこなっています。そのキャッチフレーズの第一声で、こう語られます。

「国の境目が生死の境目であってはならない」と。国というある種の「しぼり」で人の命が左右されるというのは、地球人として考えたとき、政治や思想を超えた立場で考えたとき、確かに不条理を感じます。

さて、ここ数ヶ月、先のフレーズがどうしても頭から離れないのです。「町の境目が図書館機能を生活に生かせる環境の境目であってはならない」と置き換えて。

昭和三十年頃までの人々の暮らしの中で、現代人のように東奔西走する人がどれほどいたでしょう。ほと



んどの人は、生まれた地域で育ち、生きたと思います。ところが、いいの悪いのかは別として、食生活も、仕事も、遊びも今では地球規模で関わりを強めています。日常に広い視野と柔軟な思考とともに特定の強い意志が求められます。それは最早、どこで暮らしても、老若男女も区別しません。ある種「追われる生活」をも強いられています。せめて主体的に生きるためには、生活に必要な確かな情報・資料を時機に合った方法で入手できる保障がされなければならぬと思います。

その機能を発揮する図書館が町の財政・政策によって左右されるのはおかしい。そうならないために図書館員の育成と配置は、府県あるいは国で対応したほうがよいのではないかと思うのです。町の事情によって図書館の運営規模が異なるのは致し方ないのでしょうか？政令指定都市に住もうが、山間部に住もうが生活に必要な情報や資料の入手に差があってはならないのです。小さな町

の小さな図書館には多種多様な資料や経験豊かな図書館員は必要ないのでしょうか。

図書館法では、「国民の教育と文化の発展に寄与する」「教養、調査研究、レクリエーション等に資する」と謳われていますが、図書館現場では住民の皆さんの生活に、より具体的に関わることが求められています。「生活支援機能」が問われているのです。蔵書何十万冊を誇る図書館がある町で暮らす人も、図書館がない町の人も等しく「図書館の生活支援機能」を享受できる社会システムがなければ、まさに生活格差は広がるばかりです。

平成二十一年度の京都府立図書館と京図連協の活動実績の中に、相互貸借数四万四千八十六冊という数字があります。年々その数字は増えています。それぞれの町の図書館予算が厳しい中、「他館借用」は命をつなぐ術だけれども、それだけに止まらず「図書館はひとつ」、その総合力ですべての図書館資料と図書館員を機能させる方法をもっと考えなければならぬのではないのでしょうか。

住民の皆さんが府内どこに暮らしていようが、図書館の生活支援機能を生かせるよう、京図連協加盟館がその総体の力を更に進化させることで「町の境目」がなくなるはずですよ。

平成二十二年度 京都府図書館等連絡協議会定期総会開催

平成二十二年度京図連協定期総会が、平成二十二年四月二十一日(水)午後一時三十分から、京都府立図書館において開催されました。

開会行事には仁科会長のあいさつ、来賓の山口国立国会図書館関西館次長、安久井京都府教育庁指導部社会教育課長から祝辞、勝間京都府立図書館長から歓迎の挨拶をいただきました。

その後、本年度は京図連協役員の変更期にあたり平成二十二・二十三年度の理事が紹介され、続いて事務局の紹介があり、議事に入りました。

総会の後には、永年、図書館活動の振興に寄与されたボランティア団体等の功労者(団体)の表彰式を行いました。

また、講演会として「限りあるいのちと向きあう図書館を」と題して前滋賀県東近江市立能登川図書館長才津原哲弘氏の講演をいただきました。

◆総会議事

総会は、細川宇治市中央図書館長を議長に選出し、加盟館四十九館

中、出席二十五館、委任状二十一館により総会が成立していることを確認し、議事が開始されました。

事務局から平成二十一年度会務報告、及び平成二十一年度決算報告、監事の村田久御山町立図書館長から監査報告がなされ、会務報告・決算報告ともに承認されました。

続いて、監事に橋本京都市南図書館長、大西南丹市立中央図書館長とし、中西京都市中央図書館長、井口京都市立総合資料館長、勝間京都府立図書館長を顧問とすることが承認され、総会は終了しました。

◆会務報告・決算報告

会務報告では、K-Libnetの横断検索館・データ提供館の増加、相互貸借等の増加が報告されました。

次に、平成二十一年度を実施した京図連協の総会・理事会、各専門委員会の活動状況や京都図書館大会、子ども読書絵てがみコンテストの取組や平成二十一年度で事業終了した読書ボランティア養成支援事業の実績が報告されました。

決算報告では、各種事業に要した

経費の支出等について報告されました。

◆事業計画・予算案

事業計画では平成二十二年度にシステム更新を迎えるK-Libnetの充実を期し、相互貸借の円滑な運営や、子どもをはじめ府民の読書活動を推進する事業の実施を図る企画などが提案されました。

予算では功労者(団体)表彰の実施や、国民読書年にちなむ図書館利用促進に向けた広報リーフレットの作成に伴う経費を含む収入支出が承認されました。

◆功労者(団体)表彰

府内の図書館等で読み聞かせ等図書館活動や読書活動の振興に寄与された団体・個人を表彰し、永年の活動を称えました。

★表彰者(団体)一覧

にじの子文庫 坂本 恵子様
点友会 石津 利幸様
城陽おはなしサークル 松井 昌子様

朗読サークルふれあい 上田 恵子様

みかんの木文庫 仲野 恵子様
マザーグースの会 新田 雪江様

山本 珠希様(京都市中央図書館)
森川 智子様(京都市中央図書館)

澤田真奈美様(京都市中央図書館)
増野 志麻様

(京都市右京中央図書館)
迫坪 千雅様

(京都市吉祥院図書館)
石川 佳奈様

(木津川市立山城図書館)



定期総会講演

「限りあるいのちと向きあう図書館を」

滋賀県東近江市立能登川図書館 前館長 才津原 哲弘

私は一九九五年に能登川に来て、二年半の準備期間を経て九七年十一月、能登川図書館館長として開館を迎えた。面積二万三千㎡、駐車場三百台、そしてギャラリースペースを備えた図書館だ。ギャラリーでは書家・乾千恵さんの命のを感じさせる原書展を行なったこともある。館長時代、利用者から多くの言葉をもらい、図書館はいのちといのちが響きあっている場であると強く感じた。生け花の先生で余命幾許もない癌の方に対し図書館として何ができるのかを考え、生け花の展示を行なった。また、四年間で四二〇冊の図書館の本を読みまわって



た方が病に倒れた際には、月に一回、職員がみつろくった本を自宅に届けた。この方には、ヨーロッパの修道院では図書館は魂を癒す所だといわれている、と教えてもらった。「自殺したくなったら図書館へ行く」という言葉はアメリカの図書館のポスターに使われていたものだ。私の周囲でも自ら命を絶った人がいるが、現代社会では自分の居場所のなさや生きがたさを感じる人も多く、だからこそ、図書館は本や人との出会いがあり匿われる場所でもあることが求められる。

「心の扉をあけてごらん」という谷川俊太郎の言葉に出会って、閉じていた心が開いたという人もいる。一冊の本との出会いがいかに大きなものかを示唆している。本と人との出会いを支えるには本物の図書館であらねばならない。そのためには何が必要か。雑誌「アミューズ」(二〇〇〇年一月二十六日号、毎日新聞社)で、菅原峻さん

は図書館が図書館であるための三つの条件「DNA」をあげている。一、Dはdirector。館長が館長として責務を果たしていること。二、Nはnew book。手を出したくなるような本があること。図書館の命である本は生鮮食品的な面があり、今の今をより良く生きるためには新刊書を一定水準で入れ続ける必要がある。一般に本は出版されて五〜六年で利用頻度が落ちる。ということ、開架の七分の一を新刊にしておけば七年で一新できる。三、Aはattract。魅力的な専門職員が配置されていること。職員の間には何かという財政の厳しさを理由にする向きがあるが、思考停止していないだろうか。図書館の格差は財政の多寡とは比例しない。指定管理者制度の導入が進んでいるが、それは本物の図書館の有り様ではないだろう。図書館は誰でも無料で生涯にわたって学ぶことのできる場所だが、住民が税金を出しあっているから無料なのである。

菅原さんは十年前、図書館は三つのタイプに分かれると指摘した。一つ、図書館という看板が下つただけの役所ではないところが半分ある。二つ、残りの七・八割が無料の貸し本屋さんとして化している。それは貸し本屋さんを貶めているのでは

なく、役割分担が違うことを図書館がわかっていないということだ。三つ、残り5%が本物の図書館である。滋賀県では前川恒雄さんが滋賀県立図書館長として活躍したが、単に図書館の数を増やすのではなく本物を作ることに全力を上げた。県の図書館政策としてまず人を得ることを第一歩とした。正規の職員である。

私も能登川図書館の館長として専門職である正規職員の確保に重点を置いた。また予算面では、地域に一定水準のサービスを行うために、市の一般会計の一・五〜一・七%のお金が必要だし、図書館が住民に身近であるために、中学校区に一つは要る。カウンターに立って利用者が見えているか地域の声が聞こえているか今一度考えてもよい。図書館はまぎれもなく住民のためにあるのだから。

館長は、どんな図書館を目指しどんな歩みをしているのかを地域に知らせ、また行政には蔵書計画に基づく予算要求をし、図書館が町づくりにかかせない存在であることを主張せねばならない。そして生涯にわたる本との出会い、人との出会いができる環境をつくっていくには、職員一人の力も決して小さくないことも言っておきたい。

コンピュータ化と

これからの取組について

大山崎町立中央公民館図書室

竹内 敬子

はじめて図書室に来られた方に「えっ？ピτζじゃないんですか？」と、言われたことはありますか？「ピτζじゃないんですか？」それは、「コンピュータ管理じゃないの、今どきに？なんで？」ということを知りたくまとめた疑問の言葉です。

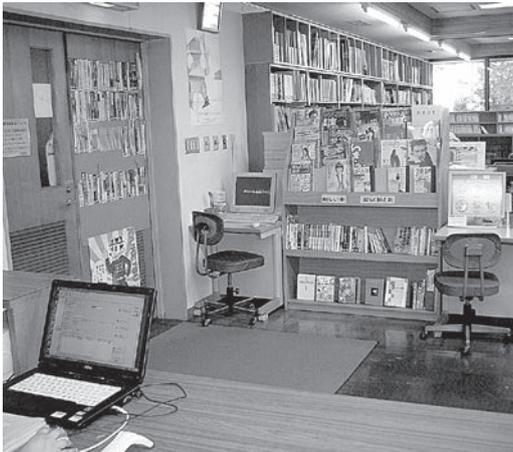
大山崎町では長年、逆ブラウン方式という方法で貸出を行ってまいりました。この方法で困ることは「何を借りているかわからなくて…」または、「返却日はいつでしたっけ？」と言われた時に即答できないことです。半日ほど時間が必要でした。

今年の一月からコンピュータによる貸出が始まり、前述の困りごとは解決しました。「機械ってかしい！」これはスタッフの素直な感想です。言うまでもなく、貸出返却もスピーディで期待させる時間も短くなりましたし、一日の集計も機械がしてくれるので、その分貸出時間を延ばすこともできました。単純なことでも一つ一つが発見であり感動です。

ただ、以前ならば本のタイトルや

ありか、利用者の名前やその人の貸出状況など、全てとは言わないまでも漠然と把握していたことを忘れるようになった気がします。小さな図書室だから出来ていたことかもしれないですが、機械に頼ることで忘れてしまうことが増えるようで恐ろしいです。

この四月からは町内の小中学校にもコンピュータシステムが導入されました。それを機に小中学校と公民館図書室との新たな関わり方を模索し始めたところです。住民サービスすら満足にできていない状況で、学校図書館と関わっていくことは無謀な気もしますが、将来の図書館利用者を育てるためにも、時間をかけて考えていきたいと思っています。今後ともどうぞ指導ください。

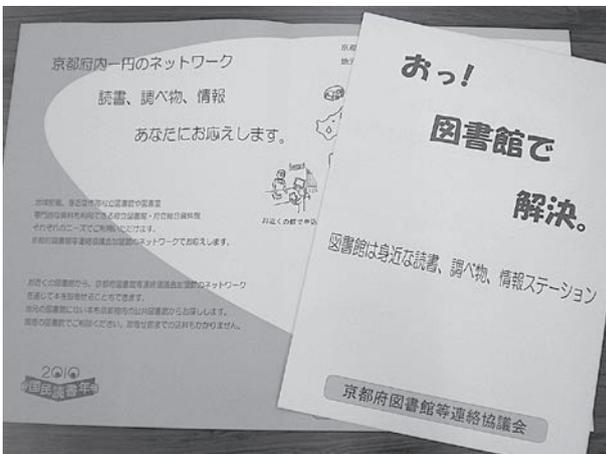


図書館利用促進の 広報リーフレットを作成

京図連協加盟館四十九館は互いに協力して、府内一円で図書館サービスの向上に取り組んでいるところです。

今年が国民読書年にあたることにちなみ、一層、図書館利用の促進を図るため、このたび、京図連協として広報リーフレットを作成し、配布しました。

リーフレットでは、「図書館は身近な読書、調べ物、情報ステーション」



ン」をコンセプトに、相互貸借など公共図書館の協力体制や物流、館種それぞれの役割分担によるきめ細かな図書館サービスに取り組んでいることを紹介しています。

この広報リーフレットは、一万部を印刷し、加盟館を通じてできるだけ広範な配布をお願いしました。

平成二十二年年度図書館・読書施設等職員研修の実施状況

第一回図書館・読書施設等職員研修では、高橋成男氏（関西アニメーションクラブ）を講師に、「アニメーション講習会」を北部・中部・南部三会場で行いました。アンケートでは、実際にやってみて面白さがわかった、勉強になった、魅力を感じたという声が多かったです。

第二回は滋賀県愛荘町立愛知川図書館館長の西河内靖泰氏を講師に「図書館危機に関する講習会」を北部・南部で実施しました。事前アンケートに対し逐一回答してもらえてありがたかった等の声を頂きました。

中部は九月十四日（火）、亀岡市文化資料館が開かれます。

新任図書館(施設)長紹介

京都市伏見中央図書館	鍋谷 英明
同山科図書館	宮崎 裕子
同洛西図書館	神田 信之
同向島図書館	氷見 博
向日市立図書館	島中 聡
長岡京市立図書館	小泉 浅雄
大山崎町立中央公民館図書室	小泉 昇平
京田辺市立中央図書館	大槻 政美
木津川市立中央図書館	山本 克実
和東町体験交流センター図書室	馬場 正実
亀岡市立図書館中央館	人見 修好
京丹波町中央公民館図書室	山内 善博
京都ライトハウス情報ステーション	田中 正和

平成二十二年度研修計画

☆第九十六回全国図書館大会

期日 平成二十二年九月十六日(木)
 平成二十二年九月十七日(金)
 開催地 奈良県
 テーマ『温故創新―平城遷都
 千三百年からの発信―』

☆全国公共図書館研究集会

〔日図協公共図書館部会〕
 サービス、総合・経営部門合同開催
 期日 平成二十二年十一月九日(火)
 平成二十二年十一月十日(水)
 開催地 富山県富山市
 テーマ『レファレンスが支える
 図書館サービスの未来』

☆第十九回京都図書館大会

テーマ『人と情報を繋ぎ創造する
 図書館を目指して』
 国民読書年によせて』
 期日 平成二十二年九月二日(木)
 午前十時二十分〜午後四時三十分
 会場 同志社大学
 寒梅館ハーデイホール

●基調講演

ジュンク堂難波店店長 福嶋 悟 氏
 『本の力〜コンテンツ／コンテナ／
 コンベア：本と人の出会いの場と
 しての図書館・書店』

●事例発表①

京都精華大学情報館 大坪 一幸 氏
 『ある私立大学図書館の取り組み』
 ●事例発表②
 東近江市立能登川図書館 発表者調整中

『東近江市立能登川図書館医療情報
 コーナーの取組み(仮)』

●事例発表③

府立南山城養護学校 藤澤 和子 氏
 『読書のバリアフリー〜知的障害・
 自閉症のある読者へ本を届ける』
 ●交流協議

平成二十二年度
 京図連協役員体制

平成二十二年度
 専門委員会委員一覧

会長

仁科 晴夫(八幡市立八幡市民図書館)

副会長

富永 正(舞鶴市立東図書館)

理事

鍋谷 英明(京都市醍醐中央図書館)
 田中 元美(京都市立図書館)
 田中 元美(京都市立図書館)
 勿滝 清春(精華町立図書館)
 梅原 武(京都市北図書館)
 小泉 浅雄(長岡京市立図書館)
 森口 光治(城陽市立図書館)
 人見 修好(亀岡市立図書館)
 塩見 裕(与謝野町立図書館)
 松岡 豊美(京丹後市立図書館)
 監事
 橋本 寿(京都市南図書館)
 大西 敏之(南丹市立中央図書館)
 顧問
 中西 進(京都市中央図書館)
 井口 和起(京都府立総合資料館)

◎研修研究委員会

委員長 鍋谷 英明(京都市醍醐中央図書館)

委員

芦田 穂子(向日市立図書館)
 岡井 一代(城陽市立図書館)
 森島 祥子(京田辺市立中央図書館)
 西陰地成美(井手町図書館)
 河西 聖子(精華町立図書館)
 久保 里美(南丹市立中央図書館)
 生駒 彩子(綾部市図書館)
 瀬戸真由美(与謝野町立図書館)
 藤原恵美子(京丹後市立図書館)
 筒井 浩美(京都市醍醐図書館)
 林下ちあき(京都ライトハウス
 情報ステーション)
 伊東 泰子(京都府立総合資料館)
 柴田 容子(京都府立図書館)

勝間喜一郎(京都府立図書館)
 事務局(京都府立図書館)
 氏松 昌平(事務局長)
 中松 幸博(事務局員)
 堀 奈津子(事務局員)
 是住久美子(事務局員)

◎相互協力委員会

委員長

田中 元美（京都府立図書館）

委員

中澤 智美（長岡京市立図書館）

志賀 清泰（宇治市中央図書館）

平田 浩三（八幡市立八幡市民図書館）

中川 環（木津川市立中央図書館）

栗林きよ子（亀岡市立図書館）

中川 英憲（福知山市立図書館中央館）

岡山 理恵（舞鶴市立東図書館）

吉田麻由美（宮津市立図書館）

田畑 倫子（京都市中央図書館）

大瀧 徹也（京都府立総合資料館）

足立 良子（京都府立図書館）

◎広報委員会

委員長

如滝 清春（精華町立図書館）

委員

新築 猛（久御山町立図書館）

鈴木 琢也（宇治田原町立図書館）

山本 明宣（舞鶴市立西図書館）

原田 幹子（京都市右京中央図書館）

楠 久美（京都府立総合資料館）

堀 奈津子（京都府立図書館）



専門委員会ニュース

◎研修研究委員会

平成二十二年七月八日（木）に京都府立図書館で、平成二十二年年度第一回研修研究委員会を開催し、今年度の事業計画について、次のとおり立案しました。

北部会場

平成二十二年十一月

場所 みやづ歴史の館

内容 手ぶくろ人形・小道具の作り方等について

中部会場

平成二十二年十一月

場所 未定

内容 図書館の魅せ方または心に届くPOPの魅せ方など

南部会場

平成二十二年十月以降

場所 精華町立図書館

内容 図書館とボランティア

◎相互協力委員会

平成二十二年年度相互協力委員会が平成二十二年六月二十四日（木）京都府立図書館において開催されました。主な内容として、京都府図書館総合目録ネットワークについては、横断検索等への移行状況が報告され

ました。

また、府立図書館が今年度取り組むシステム更新に関連して、京都府図書館総合目録ネットワークは現行システムでの更新をするため、操作性に変更はない予定であることが報告されました。

相互協力委員会事業では、例年年度末に開催している実務担当者会議の内容構成・開催時期について意見交換がされたほか、相互貸借関係統計や貸出制限一覧、連絡協力車巡回コース等の報告がありました。

学校支援セット貸出については今後のテーマ展開やメニュー内でセットの在庫状況等が分かるページの新設について情報提供されました。

その他、日々の図書館業務等について情報交換・交流協議が行われました。

◎広報委員会

平成二十二年年度第一回広報委員会を五月二十日（木）京都府立図書館で開催し、今年度の発行計画と会報第八十二号の編集等を協議しました。

また、今年が国民読書年に当たることから、図書館利用の促進に資する広報リーフレットの作成等について検討し、構成案を協議しました。今年度の会報発行はリーフレットの作成を考慮し、年二回とし、

・第八十二号 八月十五日
・第八十三号 三月十五日（予定）と決定しました。

編集子

新しいメンバーでのスタートです。よろしくお願ひします。図書館で仕事をしている人たちに会うと、人や予算などをめぐる状況の厳しさが何時も話題になります。そんな中でどうすれば元気を得られるのか？「やっぱり人やね」っていうことになります。図書館員になったころ、大阪で文庫をされている方に、「あなた本が好き？人と話すことが好き？本と人をつなぐこと、図書館の仕事が好き！」って聞かれたことがあります。図書館員の仕事や心の大切なところを教えてもらい、何時も元気をもらっていました。図書館を支える力は住民。京都府内のそれぞれの地域で、住民（利用者）の支えで頑張っている活動や情報を交換し、共に力量を高めあえる、元気になれる「会報」を、みんなの力でつくられたらいいなと思っています。